



万葉集
巻五

^ 5
1624



門利5
番1.624
卷



わらわ集の引



鼻祖芭蕉の翁ハ生涯單衣一蓑の隠士
而シテ其力を後につたせしむるに意を凝す
住家もついでにありしも其の終止の節
世を流るべからず向の世に去るも只身を
身も老死をば情をさかして西へ行
日の暮るるを東へ行出入り日暮るる
不停しあはれりた跡七甲成の宿あり

集一

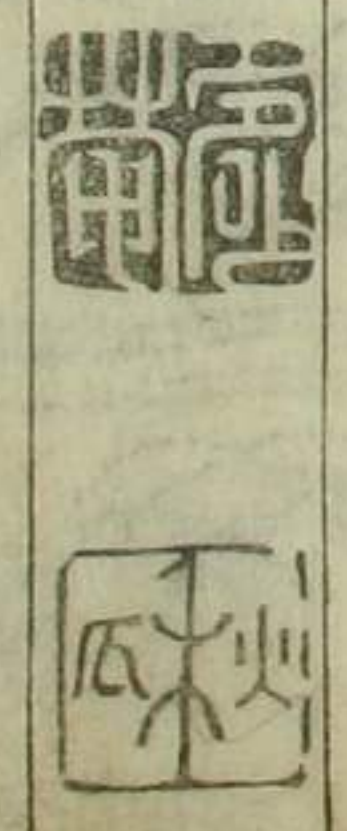
難波津の藤原公の御成を道ゆし其體ハ
常時義仲さまにおあはせするにあらざり
あゝおのれも杖尾の御成とて一集お終馬の御成ハ
詳しきなり——其徳も杖尾の御成ハ
後もく三都におありて津：海：山：の國の
さへ——おのれもさへおのれも人ハおのれ
自體をさへいへ其ほへへお碑を建て
そへおをさへいへおのれも——言は東武
河川長慶御成ハおのれもいへおのれもいへ

おのれも其角の御成の御成ありて長慶 其
里を御成を御成の御成の御成とていへ
知人あり一隅の御成あり——を御成御成
其御成再興の志ありおのれも御成とていへ
且お碑の御成を御成とていへおのれも御成
一後力を合はせ長慶御成はありて大楠
乃おのれも地を御成しお碑を御成し御成
某門を御成しおのれも御成の御成を御成し
其御成の御成を御成しおのれも御成の御成

新徳其余光を継ぐ己の百年一
向くと書けりけし翁の生をと思ふ
其の中一ふ心の空ふく世徳の人の世徳を
只天の自然の物景も其の生来時属改
川陸日徳我と或いふ人ふ花さきぬや
いふあまたいふいふとこあつて行
さねともいふも其家あつたに後下
一いふ人高く世を徳のいふあり
き一希一い後をいふいふを踏たう

之す一い志を継ぐ人徳もあつた
めらもはる連綿とおこふ事一も
欲一いふ小冊子のいふあつた
採りて其書博とていふ一い
P 述はるるいふ

十時寛政四のいふ子孟を
るの菴秋心



追福百韻

其夢ノ君 枯樹也 今も 生 病 了
 小春乃 今 夢 雨 夢 備 笠
 制 札 毛 活 走 代 君 夢 折 了
 若 小 翁 毛 却 亦 毛 一 家
 湫 渾 の 世 元 川 之 れ 巾 子 何 毛
 禪 毛 つ 也 毛 祈 の 毛 一 毛 記
 掃 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛
 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛

木瓜

波 靜
 楚 流
 吳 詠
 五 嶺
 妻 膏
 柗 線
 圓 瓜



木瓜

其頃とろろな度者 司百
 曲尺と懸者 尺人の同遊
 何事も廊のうら者 心とるり
 赤かたふき川 日と休露の裾分
 多ふ合毛 他生の縁とこり合
 舟ふ 崩者 公る者や
 藍瓶ふ 翠一 刷毛のうら上里
 歌 母者 清所の清使
 年 五ふ者 ぬ創一の目道心

卓花
 龜醉
 麦竹
 一莞
 梨凡
 雨橋
 左丹
 桐雨
 其白

香くら液も 朱瓶朱折 盆
 出代 きた見割 中別物 盆
 早きも 掃ふ 思者さうわ
 庭うら花 花の日 盆のたうら也
 橋 高くと 水ふうき 盆
 二 穂の尾をとるうら 盆の 盆
 盆 盆とるる 盆 盆の 盆
 やうつきを 盆とく 又あうら
 盆 盆 盆の 盆 盆

已流
 里塘
 杉川
 暉常
 汁南
 磨眼
 鹿子
 千卜
 鶴之

ひしき君怖い中より星さくら
つよしとあかしの霞に 殿
焚付くまじく眠まの磯ふみ
軒端ととまの霞の霞に 紫屋
松の月の虫さくら入るり行くと
かきく 糸次 虫さくら 山さくら
懐中の懐中へ 拂く 柄川
只ま白く内陣へ 巻帯
ま輪の月も来た 山さくら

石牛 恭阜 長布 花英 禰光 暮蟪 東李 烏光 畫雅

う
まろと居替り 懐く 巻帯 細代木
まろと 御重移り 巻く 手籠り 巻
人、高人とうら 明とせ 巻
桑の下も細いさくらの内さくら
雷神よふ 日、斜に 巻
今酌い 巻ふ 斜に 巻
巻く、い 呼あふ 湯川 芋の依
巻く、巻き 巻ふ 巻く 奉加帳
巻の上巻 新綿 巻く 虫

晋在 仙子 渭南 五津 如行 里修 登水 妻言 又宣

西風吹雪 青きしる 十三夜
 清工龍 赤くはく 秋を夕多ふれ
 去んくく 驥者の鈴の沈了了
 暇 了 橋よ 言 涼を 去らるく
 夜 昂る 回 轉の 口と 明く 日よ
 三 夕 月 一 の せく せく あり あり
 時 しまく 夏 旅 山 の せ あり あり
 途 おく せく せく お 妻 君 駕
 厚う 徒 至 えて 耳 あり あり

妻 秋
 以 水
 止 山
 田 保
 義 市
 文 江
 千 綱
 路 長
 把 菊

此 戸 常 明く 無 煤の 日 ぼる
 返 入 寺 筆 あり あり 老 筆 一 の 中
 河 海 の 自 紙 巻 仮 衣 あり あり
 松 之 寺 と あり あり 賀 乃 祝
 生 けり 松 あり あり 先 へ うち 水
 水 景 を 看 あり あり 岸 葎 葉 葉 屋
 尺 八 一 橋 の 流 あり あり 磨 あり あり
 膏 葉 の あり あり 痛 き 尺 あり あり
 乃 あり あり あり 入 船 あり あり 葎

画 杉
 路 白
 左 来
 北 綱
 幸 維
 湖 雁
 白 枝
 松 奴
 範 路

るやきつる日毛さるる
ことし使のさむし可く
并狩いおぬし品生毛と能
能い日あきるる往捨し
學少きい子の所ぬ所
認くの時あきく供待
和時うく積く聲入骨入
青石屋ふふ満くし
又きく毛さるる毛あきぬ鮮者

淵二
有鯉
年路
兔園
外示
沙野
如岡
宗普
山島

草臥の星の投引く
吾風を誘ひさるるぬけ
際毛霞あま白あけ
沙植の花毛蒼し椽乃先
世同刻する律者境界
川初ふ涼も水巾着一日路
糸少り初く毛乃あきか
去中、去す糸娘の中
匿居の意あきこれ隠居也

山島
呂中
我后
恭我
東林
連金
寛志
右行
不及

池の蓮、井はとて、青も
数全、草一、優、毛、道、具、第、う、
耳、中、一、上、此、く、ぬ、を、と、く、あ、く、ま、く、
を、夫、ふ、ふ、ま、と、梅、れ、玉、鬢、
ろ、い、く、と、正、月、を、記、す、川、の、風、
城、下、へ、あ、る、毛、入、り、極、
定、り、中、を、齋、す、つ、ま、も、毛、赤、城、王、
宿、り、續、り、子、君、を、暇、を、記、
釣、橋、の、一、舟、を、呼、ん、ど、返、る、し、と

南枝 徐来 里杏 中和 岩々 谢人 後省 花明 東張

生 色 生 線 深 岡 川 舟 舟 舟
生 觀、の、昔、あ、い、出、す、は、行、り、前、
色、は、く、濁、色、 杉、藪、 あ、く、
生、觀、の、昔、あ、い、出、す、は、行、り、前、
線、え、あ、れ、る、舟、川、 小、娘、
深、物、も、心、あ、る、川、の、極、 岸、島、
岡、も、あ、る、舟、川、 舟、多、ら、り、
川、岸、の、舟、も、あ、る、舟、川、 山、稼、
舟、も、あ、る、舟、川、 舟、多、ら、り、

長邦 如 江 牛 江 尾 東翠 舟之 恭系

時よあふくを言ふ花供養
影もなき影もなきは表

霜後
波景

諸家 追憶の吟別録号

四季之吟

陽光もあけゆく人々の肩より上
翠峯の深く深く明く水了れ
以てさうさう夏の日も水うれ
雲持もあけゆく怖れなきの橋

暉常
春峯
夏晴
冠亭

川持もあけゆく所もさく
一羽常の解の糸もさく
かきよふもあけゆく影もさく
若木もあけゆく影もさく
玉川の氷も深くさく
鳩鳴もあけゆく影もさく
因雨もあけゆく影もさく
さくさく影もさく影もさく

亀鶴
福光
蒲夫
千夫
文狸
羽貞
柳條
此川

一本はく 嶽の 替り 葉摘られ
水底ふ 山石の 動く 水結了る日
草の葉の 立ち 光を 照らす 木下 園
盗人 草を 大根 ぶる 小根 一と 手
穂を ちり 草を ぬ 日 飾り 花 衣の花
目ふく 鏡 翠の 崩れ ちり ちり ちり
白の あら じり 小 溪 流 行 天 堂 河

巨仙 萬籟 朱雁 中 山 鈴 吳 雨 柙 珠

草くち ちり 中 日 小 暑 一と ころ ころ
節 一と 花 ちり 替り 捨り 庵 ぬ ちり
花 四 毛 獨 活 ちり 清 水 ちり
海 ちり 白 日 の 曇り ちり 神 一と ちり
け 川 霧 ちり 橋 ちり 旭 光 ちり 霞 ちり
新 暮 ちり 暮 ちり 白 日 ちり 白 日 ちり
ちり ちり 言 ちり ちり ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

大菊 山 汀 秀 外 飛 津 東 鳩 遲 平 甘 百 丸 林 人

山くまを望みし川をさぐるまみり川

秋苑

雪の日も竹を自在に直りし

鰐眼

かけきりし流す流す長堤

亀醉

秋の日の梢子長交まみりし

麦竹

雲と月を架す今も流りし

瓢香

虫の音のまをたれりし

手月

暑さも毛舞ぬ氷の心太

柳子

流るる字と尺と

星瓜

葉系うし出くしゆくむり部

柳尾

世を夏とと秋とと庵も水鏡か

一河

古井戸へ下りて音も木下

波景

竹根を動く物も氷うれ

脣山

露の蒼を花を日暮了る

冬瓜

花の根も其白のくも木槿が

相雨

翁も氷氷の氷も金も

巴流

何あるの蝶の羽もさねの鳥

馬卜

相尸と行まふらしきうか
 表家うきまの葉内を菊の花
 蓮花く山子青あ家町るうれ
 小まふ毛入日の長き林の中
 色山を照の目く紅葉うれ
 山吹わ夏のもくまを夏をま
 かを河よわ流止あま行日のあ
 余の恋い何をもまぬね露が

里塘 藤子 千卜 杉川
 羽橋 左丹 白山 園靴

百時ち野の草煙日あまら
 寒く菊やおまらりいんれ草の骨
 水と水隔を出する氷うさ
 水きわ水を流す下羽つく長
 水ゆるむるいしあま行田堀が
 ちくく雪うきぬり青風
 枝まら〜長〜短〜糸糸
 臺／から 見ろえあき流〜か
 籠ふるくわあま節く里の家

敵蹤 茂陵 鳥夕 羨巾
 如氷 里羊 帳片 巴文
 町情

海山の色を待たばはつ時雨
行旅のいほりしを記海の音
垣らふい新の落羽は林の風
霞のたのむ物お松の花
葉のそれお山吹の散の濁り
を女制わ時るふさぬ花の色
橋を行く春をのさす夜の香
まふいふあふ高橋了 更 衣
蒼うら香をこふ春や萩の花

那は 桂石 浄棧 卜石 水至 和夕 葉尾 玄圃 梨尾

氏羽生

亭狩お旭、溜お供あり
柏堂ふきの聲く接了南
暁を毛いふぬ色さり女中子舞
曙 香ら松の青はわ家しとれ
野 啼や日の照る松よ 百 家
蒼うら葉 隈ももる牡丹うさ
ほんのすし、霞お旭や紅のそれ
初うら唐子あきしや百合の花

我后 暮嶺 花葉 仙子 周南 五津 里修 東李



門前ハ室小葉何れも花津也
 笑乃戸也言とて詠れ空の黄昏
 春風也郵也一きり地也言を
 ち〜〜と霞のくも乃や産うれ
 旭〜〜と輝の留あつた今乃霜
 啼 神〜〜と遠か〜〜と日は〜〜と暮
 行 古〜〜と又人里也山さ丸程

冬水
 禰光
 文江
 竹志
 兀頂
 和氷
 如竹
 鳥光

、 荷西

卯 春〜〜とふも〜〜と垣根の月を〜
 雪 晴〜〜と乃〜〜とむ月乃霜あうれ
 草 積也山〜〜と直子 ころもたれ
 片 神ハ月極也輕〜〜と京時雨
 泉 水也言 水子辰 晴〜〜と落葉うれ

兔 山
 巴 山
 落 枝
 柳 和
 春 言
 路 白
 幸 雅
 柳 候

、 武四尾

、 馬見塚

、 今五

駢ぬきく出多れ先毛可るれ

上之邑

五峰

風もたふく流もあらぬあり

池守

其朴

年くお都く高き水空うれ

小綱

湖有るまより今おの空

左束

か龍星のつを種わ返り雪

南行五

画杉

林一さいゆ海と流えと水のそ

上中系

華叩

雪おろす志望の夕や早小平

永泉

風乃日暮千々るわ川有る曲り取

江家

妻母

所く流まはる枯柳うれ

一古行五

瓢

蘇かときわく色わ納豆汁

善小五

干綱

た川言ゆし麦の枯柳わ雨く手書

小汗

其志

秋半川わ信子取行く白帯

下思

路長

野の七角わ帯一の菫く一物

巴陵

青嬉し一時的を菊 寄 破障子

祇束

あ布ふしく冷めて清流わ備 月

下中系

其川

宿書也あつる物ふほく行く

武程

止山

きくしん不たき多きくお花神うれ

呂中

白唄いとねまもあふきらしす

深月

新舞、漏、山後、きり、きり、ふ

田保

大勢、きり、きり、きり、きり、きり

女 奇美

かき、きり、きり、きり、きり、きり

新曜

まく、きり、きり、きり、きり、きり

貴十

草も、きり、きり、きり、きり、きり

大田 松

自古、きり、きり、きり、きり、きり

永田

溪舎

新書、きり、きり、きり、きり、きり

芝紅

武金川

千種、きり、きり、きり、きり、きり

連舎

そと、きり、きり、きり、きり、きり

為白

芝浦、の、ゆき、きり、きり、きり

豊鼎

あつ、きり、きり、きり、きり、きり

範路

あつ、きり、きり、きり、きり、きり

しき

吹、きり、きり、きり、きり、きり

しき

從松戶臨書黃連

眠入	石	中	於	極	書	四	寸	面
本	此	也	と	を	さ	し	め	梅
水	多	也	也	梅	と	親	す	新
身	自	也	こ	よ	し	信	徳	多
床	一	さ	わ	之	の	こ	ろ	菊
忌	替	く	る	衣	毛	芳	一	菊
草	可	り	也	其	鴻	多	く	人
荒	知	く	夕	日	う	つ	是	花

長	布	定	雅	雁	松	第	二	千
思	水	龜	玉	青	花	雨	多	足
周	志	多	年	流	楚	清	水	以

石	燈	籠	を	と	り	く	覗	く
身	也	也	野	毛	群	く	日	暮
行	能	也	構	系	の	風	書	音
蛇	書	尺	巾	明	書	社	也	友
八	朝	也	幸	多	月	作	也	明
以	手	の	一	枝	退	く	也	人
菊	内	く	也	島	野	と	川	多

雨	多	足	周	志	多	年	流	楚
清	水	以	水	青	花	大	森	青



煤く不夷星の嵐や少のま 句
宮子も茅屋の表や海を雪
層や水音を流しき日と暮ら
菊いぢりし秋と居る也初 作連

禁断の場を糸齒ふ亭如うれ
陽半や帆を巻く砂をら上
菊の時の姿見をきく花火うれ

秋まの山をとりしつれはほほ
子らとをハ辞ししは也 柚をら花
晩涼をゆめ日毛を 花りし
引く香や巻く漁火の明残り
八月の影かを淋し 鹿をら
川音の高くふりし 夜をら
百菊や八日暮る香を 化糖 水
葉の花や白拍をあふりし 上
水の橋も雄姿 一 逢は九程

勢味 理玉
治棠 柙
真る川 急
勢久辰 之 箱
性

秋 葉
糸 江
片 夕

渡江
柏 葉
秀 哉
老 道
草 兔
舊 路
楚 雲
梁 舟
江 魚

石の口とく音あやほ月珠
行岬ハヤも滑出く清水うれ
初あやハ常日蒸た菴あや厚

相浦賀

鍊石

十洲

棧尺

能者風親る印衣をよれたく吹雪

甲子出

石片

竹身

旭冬

竹我

白也樵まの素者あうく髪
暑き日也乾瓢印能く君の上
いそつよの眼もく川城者も老うれ

萬力

需も雪もさふ素道く山後のれ

二日事

一古

海も草もく思ふ神も層もあうれ

常廟来

鏡如

古仙

素乾

醫之

馬も脚も草もく尋ね花神うれ
行秋や草もくもあきて虫のうれ
古中の手あぬやうも雨も佳うれ

中も多しふ世と勤くくもいんこ多
きあも又草も厨もくも涼うれ

安食

其白

東林

初中若人、遠く水鏡うれ
昨日とい限、ぬき、牡丹うれ
白菊も若く、おき、月夜うれ
秋の序も、おき、夜を
誰にや、鼠を、余所、おき、うれ
側、おき、花、おき、おき、うれ
地、おき、水、おき、おき、うれ
白、おき、おき、おき、うれ

武蓮谷

素秋

中和

徐来

不及

里吉

龍之

古行

南枝

影見、おき、おき、おき、うれ
香、おき、おき、おき、うれ
福、おき、おき、おき、うれ
蒼、おき、おき、おき、うれ
追、おき、おき、おき、うれ
青、おき、おき、おき、うれ
赤、おき、おき、おき、うれ
白、おき、おき、おき、うれ
涼、おき、おき、おき、うれ

紫十

里翠

松翠

東翁

書十

本碧

松叙

白枝

涼波

草大根を是うう旨く食ふ
不取るる男と為るる 角力うれ
掃 ちあれ 薪の中を杉空了ふ
命のそれや園とあつて垣取え
まいれおまうー涼きの為葉のれ
山葉花や百年一先中咲きつ終
昂くうり花庭もみきの為葉は
葉のそれの果も同出のま葉山子が
雨しきも不二のそれはふりす

牛邑

有之

文宣

幸寺

宣蘭

栗橋

頭丸

青牛

櫻山

水碓

月指

中田

雨川

清うれ紅の裾うー 以中うれ
聲引くを 半分を色遣了前
初あはら遅き久君皆葉うれ
小夜あはら川もあう毛 旅者有
あまの香不見ぬ人旅一住所
葉のそれおまうー 寺宇治のそ
けりりあ千を啼き川ゆあ穂
焼 焼く那の川 伝や終子のそ

雨矢

古江

太白

馬池子

開二

芦帆

諸江

白圭

里雄

晴枝

雪々玉も神堂も行く町もうか
花も狂ふ髪の花もさるも乱

花
雪山

小春も毛ゆりいさく散り川櫻

忍城
青我

一節も細残は流の氷うも
平舟も舟も残すわ郭の

魯道
方雅

朝もや行くくさる日の残り
一夜も友啼し融す 睡うれ

無涯
星羅

花守の第も四月や春の暮

止水

更なほと水音 高も夜をとうれ

其幸

雪の日のあかりとわ水心も

寒松

柏葉も秋の雲をわすれ後川

五雲

右もあつと暮昏 暈し五月雨

桐藿

歌本もこのまゝ種もく本のま

器水

後道も一葉もつりわ水心花

青湖

あの宿も名月見まゝの嵐

義市

思明る庵連

峰もあつとく月あさいぬ町も

年路

山仙や小春の草花を花を兄
人ハ又我を待一一夜を雪
冬林や氷を多く朝を雪
如くわね様と雨を細涼を
風や涼く涼を 秋を春
海にとちよ一鳥を啼よ千を
空まくの 空をひふを渡するをま
るもく ぬもく 夜の 鳥をま
掃き 埃も塵一 羽の 鳥

冬園
女示
沙降
如園
春着
把菊
亀翁
鳥雪
雨雀

白轉一 冬を止るく 秋を雪
ちをわを 替へぬ 秋を 秋を
秋の言の 自然と鳥一 冬を雪
衆の ちを 傳へて 焚火や冬籠

陸賈
其明
東枝
席遊

むらむの 冬を 春を 夏を
山をの 尾を 冬を 春を
山頂の 月を 冬を 春を
夕う不や 春を 秋を 冬を

雪叩
笑牛
也好
官鯉

相簿一昔すもやうきを
けいよきそく細一鹿の序
あしきく花一色わくふり
稲村を小争の如く叶るうれ
月も花も多し重しき冬の香
味うりの鳥慣子よきわきの香
初をわするまゝくし偉なり子
早見むしほきん行所と花即し

射人
義邦
花明
東翠
聖路
後有
東張
琴阜

葉のうれわをくん後一ハ陽在免

石牛

前出畧

正法大

芭蕉をわたりてを葉うるうれを法
日一たのきくをまへり水俸花

水府
如
文江

唱林者もあまの詠わ中を葉身
池水もあまの詠をみらうれ
早川もあまの詠をみらうれ
善行もあまの詠をみらうれ

吟
葉
後川
馬末
車大

又掃り止かすも八俣木の葉

五
息又

命の日を心ひあはくまのわあ仙苑

楚派

はよましく籠る細工の葉のまが

素膏

飛ぶをゆの満千やあつそ角

泉花

る川をわ曲折るを葉とま

一晚

野を川わ流るも早のう流る頃

計南

曙を多碑一青一香一く程

恭我

かゝるも流の言中く雲うれ

五山頃

我う家も中く廣一煙くく心

吳派

一日を入お静に葉摘うれ

波靜

才をよりと捨くもまぬ故をが

尺五

川も流の心地くす終部一に

敲氷

こりくくの明像違一八重履

乱竿

一川家のゆらみをまら那分が

采我

行やまをの返一わ夕一くも

柔後

中しくゆく 咲清中わ能の葉

秋瓜



古池也

陸飛こむ

水やう音

做表翁画自今亭
吳詠謹寫

其葉のねき色やうむし	喜林
今植し竹ふあおし夕原	柳居
よー乃山花の木の間の花は	鳥碑
あんなこを啼や山葵の花生	古盤
けけいこらとやうな花	門庭
空折や人きり力の静の	巻阿

泉香之吟

雪色の梅も山に花信と書き寄

吐花樓

れ秋とくはま枝も多し 南川

南川

梅も枝もくさるる音わむ乃雪

楓人

ふもくわさるる眼もも羨しと

楚諾

眼も心も木もま射る 舟衣も

舟堂

能ふ見まはれり人地 津中も

鯛餅

單ももるるの目も 所も

希景

繁しわ花より外も心も

仙泉

其ははの葉も及ぬ瓢の如

花天

高きまの葉も同葉も 了か

中精

投入もまはるるあはるる うれ

瓢船

流りよの氷もるるわ 舟も

喜路

梅の香も竹もわさるる 鐘も

梅溪

梅もぬ 外もものまわも 見ん

交櫻

活もれは 桔梗もか味も 菊

鼓嵐

雪もわ花も 中もま 里も

花徑

雪もく口も 雪も 雪も 雪の

良雪

柿のこころはいらふ新雪の音
古原

焚く物も若も蘇るうらみの音
午橋

右引も早うそすう 寂うた
千泉

葬一わ流もさる借も咲かき
芳杜

五六河ふも怪うる部一う南
柏亭

重りしくは休む日や年一忘
眉端

すいこくこころは梅の芽虫か
梅月

別うもてつ花ふさむる部一が
捨毛

通夜の眼の力草一り梅のこけ
煙水

流先若知もぬ海うら海岸か
芝六

重干わちきもたきとも唐綿
傘車

琴琴わ一羽と只つれ岩の上
五溪

青若わ水ふ道ふ 甘き香
波仁

剛力のほくく節のほ水か
且中

寂もつらう危ふ海くぬ部一うふ
玉簾

字ら水の乾く河もる水か
草光

暮るわ若ふこまふ日をさし
蘭陵

夏咲るの涼一くくむ水心花
香音

星合わ待得ぬもくも只一夜 風夕

形ふいさし隙のあふし一絳子のあふ 芳旭

更科の捨しきも居る葉の字に 柳志

字多る原の枕のさしわ部しと 柳白

雪の啼し梅のさし梅の枝が 抱雪

はつ梅のさし毛吹のわ 母子襦 葆光

花の年ハ字しし毛花のさし 白芝

柳のわ明し所のさし 下道

るの日の羽さし軽なしきか 辛音

川いあし草屋も、越さる守りあのみか 白朮

田うふいおさし、あふ 日若し了れ 東去

梅の枝のさしとさしとさし 蒼うれ 如夷

字のさしとさしあのさし了京のさし 扇下

山さしとさしあのさしとさし 松う直 万壺

草のわおさしあのみさしとさし 遠のさし 遠子

礎の甲のさしとさしとさしとさし 千老

芭蕉葉のさしとさしとさしとさし 翠のさし 翠山

多川の虹のさしとさしとさしとさし 翠山

川村のゆりてわ伊勢のちりしづ風

巨流

世の中をよし一ゆく一ゆかをたをら流

富山

那山そののちし一ゆわ終りの夜

秋野

梅の香のちをを隔ぬる日か

五原

いりり一ち思ふる所の家わ山にゆら

水崎

清戸のゆりて飛く一帯一帯代田

畔路

我孫の瓢 摺りてく流ゆらる

志棟

見らるらしま山のかくく一田植る香

菜子

常盤のふもを葉子新 羽ぬきる

蓮朝

右の屋のうらうら出の流わ夕暮るん

貫丸

おろし思ふ一峰や嶺をて秋の雪

治原

立流わ風ふ知くまぬ情を 瓢を

楚秋

女川とくを蹴りて一帯を 帯

左右

尾陣 ちをりし神たてく 堪るる

遊之

船葉や少白州 浪を光れ時

沙路

ちをく一帯の風をわ 舟中

亀率

凡本橋 渡返一帯も 氷うれ

燕音

ちをくわ世果を 甘んばるる 千草家

杉下

淨持るるの、いづれや蓮のくが

潮才

羅徑

秋多川や石のせりまの軒家

汝久

虫蟻いよほ紙捲るや春の雨

龍尾

空也云と眼くゆく紙衣衣

鈍子

紀亭

るや白し競た梅香枝

松年

山風の落ましく言わ小曲可る

其也

梅さるや幸し活あ旭香あ香

樹牛

か一師一帝とく新ま陸が

志之

花あむるもその香もわ枯地る

大如

炭焼のまも向さるる雪新うか

羽生

相舎

塚うゝお羽矢わ梅の多怖し

其水

碎碓の目おぼるる一喜の空

三布

次の名の供の辭わと一光

畫耳

し多や美の神を柳と新

儘石

刺とくうゝおまふい初るり神いさ

紙中

鳥とい咲ぬ内るり菊の花

徐杉

あゝ多まわ新あ山勢の流を

黍里

冬見日いたしは本る幼れき

須か

里桂

時るわも借こりる旅路亭 思 望之

山後山もさしきふ常わ高くと 南 打

水中の月、飛こむ陸うれ 美 而

薄中の水、引付く星有らふ 大 里

牛しく越す門もあふまう一鏡月 金 本

美らさうわおふも香ふ清く居 五 葉

さの和ふさしは音する格うふ 林 石

清色の時代、凡も喜まふれ 高 飛

アキ信よいらぬの指も梅の花 家 人

吹止むと屋根もるるある春うれ 程 鳥

何れもわ指いあす糸牛、ハ糸 銀 糸

さうわ布しく伸、表浪の波 手 括

糸の束の音、明滅お拘うふ 松 雪

葉茂月、あやうほりや神、うけ 冬 樹

さき人、も傳ゆらう居る帯、か 百 綱

神植の字、競わぬ、う龍 梅 童

あつくあつく、上布ぬもあふんを 林 手

人の眼の布ぬ所を、あふんが 来 儀

管佛と身代りしと時音ふ

於後 希

暁をえとく眠し暮のる

高崎 江

七夕のおまひ初しー下之夜

菅原 水樹

さるはと毛子の仙女水うれ

手取 仙里

水の流れにわ箱子の住所

田代 娯嶋

むと房ふ春の日は散ら散の飛

高松 是橋

青苔も肝おある中の人こる

高松 其る

見遠し一去年の接穂や地の花

高松 文志

郭へ免い信をたしーアムク

高松 本羅

いささかよわ能も後ぬ糸はうり

下 市南

芝草や那まい梅よ小中川系

杉戸 夜叩

梅もさしと降ふふ力くく梅の面

六ヶア 湖雲

葛もこれと葉あふるりー家ハ

棠平

他とくも歌ふい梅のぬ花即ハ

高崎 其白

妙次ハ 神 ありを了後の月

蟻則

きのふつうアまはあなるまを名葉氣

東武 海光

地を何しお物の中ゆしをす

長車

福妻やをさしくアゆか押の石

号尺

